

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 25 日現在

機関番号：32686

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26580003

研究課題名(和文)暮らしの哲学：生権力論を起点とした現代生活の総体的把握とミクロ分析

研究課題名(英文) A philosophy of our daily lives: developing macro- and micro-understandings of the contemporary life from the perspective of biopolitics

研究代表者

山森 裕毅 (YAMAMORI, Yuki)

立教大学・現代心理学部・特別研究員 (PD)

研究者番号：00648454

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、生・技術・権力が絡まり合うことで多様化し複雑化する私たちの暮らしのなかから、暮らしを成り立たせている知を取り出すことを目指した。山森は「場所」に焦点を当てて、場所と暮らしの関係を分析する方法を考案した。渋谷は「育児」の途切れ途切れの構造を分析して、そこで構築されてきた「部分的な合理性」を抽出した。久保は「家庭料理」を軸にして、家庭についての言説とテクノロジーの変遷を明らかにした。成果はそれぞれ論文および口頭発表の形で公表された。全体として、暮らしのなかの知を多角的に検討することができた。

研究成果の概要(英文)：This research project aimed to extract the knowledge enabling our diverse, complex daily lives at the interplay between life, technology and power. Yamamori's analysis was focused on "place", and he elaborated a method to analyze the relation between the place and the daily life. Shibuya examined the montage structure of "child rearing", with a focus on the shaping of "partial rationality" in its process. Kubo reviewed the idea of "home cooking" to illuminate the transition of technology of and the discourse about domesticity. Results and findings from the project were published in papers and presented at conferences. We conclude that the project successfully examined the knowledge in our daily lives through a multifaceted approach.

研究分野：哲学

キーワード：暮らし 場所 育児 ひとり親 家庭料理 テクノロジー 家事 ハンナ・アレント

1. 研究開始当初の背景

【山森裕毅】もともとフランス現代哲学と精神療法に関心を持っており、その観点から精神の病や逸脱者などと社会の在り方との関係について分析する方法を構築したいと考えていた。その一環として、ホームレスの多い地区である大阪釜ヶ崎で諸々の活動(「アジール・呱呱の声」の会、現場力研究会、支縁のまちネットワークなど)に参加していた。そこで「家がない」、「私的領域がない」ことの哲学的意味を研究しようと考えていた。2014年5月より、精神科のグループホームで利用者の生活支援をはじめ、精神疾患のある人々の暮らしに密に触れることで、フィールドを変更した。しかし、テーマは大きく変わらず、生活を維持することの難しい病を持つ人々の暮らしを通して、「暮らす」とはどのようなことか、どのように分析することができるのかという問題に取り組んでいた。

【渋谷亮】これまで心理学や精神分析を教育思想的・教育哲学的に検討することで、子どもの主体性を捉えなおす研究を行ってきた。その延長で、近代社会における育児のあり様、および家族や親の位置づけに関心を持つようになった。確かに育児や家族といった個別主題については、すでに社会学、フェミニズム、発達心理学などにおいて数多くの研究がなされている。とはいえ、「暮らし」の捉えなおし」という観点から家事や育児を検討する試みはさほど多くない。現在、公的領域と私的領域の境界が曖昧化し、私たちの暮らしを取り囲む体制は大きな変容を迎えつつある。それゆえ、家事や育児のあり様から暮らしにおける主体性や共同性を再考する研究を試みることにした。

【久保明教】本研究開始まで、ロボットやAIと呼ばれる知能機械の開発・受容局面について、M・フーコーの「生政治学」をめぐる議論をしばしば参照しながらフィールドワークや参与観察などの人類学的手法によって調査・分析することを通じて、「人類にとって技術とは何か/何でありうるか」という問いを探究してきた。その過程で、産業社会・知識社会を支える先端技術と人々の日常的な技巧をともに含み、両者の様々な接合点から構成される領域として「技術」を捉えうる方法論をいかに構成するか、という視角を得てきた。家庭料理は、一方で食をめぐる産業やテクノロジーの展開と切り離して論じることではできず、他方で人々の多様でミクロな営みでもあることから、家庭料理という産業的で計画的でありながら日常的で雑多な営みにおいて、「技術とは何か」を探究する研究を構想した。

【全体】上記のような個別の研究背景を備えた三名が合流することで、現代における「暮らし」や「生活」に対する多角的で集合的な

考察を集積できるのではないかと考えた。三名の研究視点が拡散しないよう、「生権力論」を起点として研究を行っていくことを指針とした。

2. 研究の目的

【全体】「生権力論」という考え方がミシェル・フーコーによって提示されて以降、生活は生・技術・権力が交錯する場であることが明確になった。また実際に生活は多様化し、複雑になってきており、さまざまな困難も新たに生じている。とすれば、そこには日々の営みを成り立たせるための新たな知も生まれてきているのではないか。私たちは日々の営みのなかでも「住むこと」「食べること」「子どもを育てること」の三点に着目し、日常的な実践を成り立たせている「暮らしのなかの知」を浮かび上がらせることを目的とした。

【山森裕毅】精神疾患を持つ人の多くは、仕事をするのに多大な負荷がかかるというだけでなく、暮らしを維持していく活動そのものに負担や不安を抱えている。彼らの生活の維持を支援する仕事をするなかから、また現在の生活の在り方を論じた著作などから、私たちの暮らしがどのような構造を持って成り立っているのかを哲学的に考察することを目的とした。また暮らしを分析するための概念的な道具を作ることを目指した。

【渋谷亮】家事や育児は、単調な繰り返しや雑事からなるものとして、近代社会において影の領域を形成し、「労働であると同時に労働でない」という曖昧な位置づけを与えられてきた。本研究では、こうした家事や育児のあり様を捉えなおすことで、暮らしにおける主体のあり様や共同の形式について再考することを目的とした。そのため、第一に、近代社会における家事・育児の位置づけを理論的に把握することを目指した。第二に人々が家事・育児に対していかに取り組んできたのか、また家の内と外の葛藤をいかに調整してきたのかを分析することにした。

【久保明教】二〇世紀初頭から現在に至るまでの日本における家庭料理の変遷を分析することを通じて、暮らしにおいて産業的技術と日常的技巧がいかに多様で動的な結節点を持ってきたのか、持ちうるのかを明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

【山森裕毅】テーマを「場所」や「集団」に絞り、文献研究と広義のアクションリサーチを採用した。文献研究としては、フェリックス・ガタリの著作『精神分析と横断性』、ハンナ・アレントの著作『人間の条件』などを重点的に扱った。アクションリサーチとしては、大阪にある精神科グループホームにて非

常勤スタッフとして利用者の生活支援を2年間行った。また2016年10月からは東京にある精神疾患を持つ人やホームレス状態の人が集うフリースペースの活動(当事者研究やアノニマスミーティング、哲学カフェなど)に積極的に参加して、自助のための対話技法や地域移行の在り方などを学んだ。

【渋谷亮】第一に、家事・育児の位置づけを把握する理論的枠組みを構築するため、家事労働についての思想的議論やハンナ・アレントの労働論を検討した。第二に、暮らしにおける主体のあり様を考察するため、ウーマンリブ、フェミニズム、精神分析の文献を検討した。第三に、育児本、育児漫画などの幅広い文献を対象とし、戦後日本の育児・家事の変遷を検討した。第四に、ひとり親家庭における育児や仕事のあり様について聞き取り調査を行った。

【久保明教】家庭料理をめぐる産業的・計画的・合理的な側面と日常的で移ろいやすく私密的で情動的な側面を、ブルーノ・ラトゥールらが推進してきたアクターネットワーク論における「長い/短い」ネットワークとして捉えた上で、両者がいかに結びついてきたのかについて、主に戦後日本の三つの時期(1960~70年代、1980~90年代、2000~2010年代)に焦点を当てて検討した。具体的な調査手法としては、食産業および家庭生活をめぐる文献調査、三つの時期を代表する料理研究家・主婦向け雑誌・料理情報サイトをめぐる分析、それらの媒体で提供されてきた家庭料理のレシピを日常的に使用し、調理・賞味・分析を繰り返す参与観察を行った。

4. 研究成果

【山森裕毅】

(1) ホームレスや生活困窮者を支援している「支縁のまちネットワーク」という宗教者の団体に依頼され、釜ヶ崎での活動報告として「釜ヶ崎という場で哲学する～「アジュール・呱呱の声」の会の活動」と題する発表を行った。「アジュール・呱呱の声」の会は、単身高齢生活保護自給者の引きこもり、公共性の喪失、孤独死に対する支援事業のなかの活動のひとつとして行われていた哲学会である。この会が提示している「アジュール(逃げ場)」という特性に、逃げ場のない現代社会において人間性を保護する意義があることを考察した。

(2) フェリックス・ガタリの研究論文として「制度分析のプロトコル」を発表した。制度分析とは、精神分析家であったガタリがラボルド精神病院や社会運動を通して発展させた精神分析の応用形態である。これまで制度分析の概念群やその使用法、適用対象について具体的な研究はなかったため、それを行なった。病院内やその他の社会集団内で形成

されるヒエラルキーを越えて、治療的なコミュニケーションを開くための分析方法を理論的に明らかにした。ガタリ思想研究ではあるが、精神科グループホームや精神科デイケアなどでの実践経験があつての成果である。

(3) 暮らしを分析する方法を構築する試みとして、「(居)場所」に着目した「場所と過程をめぐる試論(一):暮らしを支える場所の最小構造」を発表した。ハンナ・アレントの『人間の条件』とレイ・オルデンバーグの『サードプレイス』に基づきつつ、また精神科関連施設での経験を踏まえつつ、人間の暮らしに関わる場所を三つに区分して、それぞれの特性や関係性、それらの破綻の仕方などを考察することで、「複次的場所論」という形で分析方法を考案した。

(4) 付随的な研究として、精神疾患を持つ人たちが日中に過ごす居場所型デイケアの意義とそこにおける支援者の実践についての研究を行った。デイケア学会において「余白と濁り」というタイトルで口頭発表し、後に同学会のジャーナルにて原稿発表した。

【渋谷亮】

(5) アレントの労働論を出発点として、家事労働の変遷を検討することで、近代の家事・育児が、社会的な労働の残滓を、家の内で孤独に寄せ集めつなぎあわせる作業であることを示した。そこから家事・育児を、生命のプロセス的性質の寸断を取り繕う断片的な営みとして捉え直した。

こうした視座から、精神分析やフェミニズムの主体をめぐる議論を検討することで、主体としての母のあり様を論じ、コメント論文「引き裂かれを生きる」として公表した。この論文では家事・育児が強制する視点の分散という観点から、特に田中美津の議論などを参照し、家の内と外の間を組み合わせ、「母である」とことと「母でない」とことに引き裂かれて生きる主体の様態を示した。

(6) 人々が家事労働の断片性といかに取り組んできたのかという観点から、戦後の育児の歴史を分析し、「戦後育児史ノート」として公表した。具体的には松田道雄の育児書、桐島洋子の育児論、ウーマンリブの試み、80年代以降の出産・育児本、ひとり親家庭のための育児書などを検討し、断片化する家事労働に対して「部分的な合理性」がいかに構築されてきたか、家の内と外の葛藤がどのように調整されてきたかを明らかにした。

(7) ひとり親家庭における育児について聞き取り調査を行うことで、現代社会における家の内と外の間関係性および共同性のあり様を検討している。この点に関してはいまだ研究成果の公表はできていないが、公表を目指して分析を進めている。また本科研の研究成果を他領域と接続するために、アーティストを招いて「家事とアート:労働と制作のあいだを考える」と題する公開研究会を企画した。

そこでは家事とアートとともに、多様な諸事物を变形し組み合わせ配置することで感覚ないし身体へと働きかける技術として把握し、家事とアートを比較することで生きる技法としてのアートのあり様を検討した。

【久保明教】

(8) 戦前/戦後日本における家庭料理に伴う産業やテクノロジーの変化を背景としながら生活史的ないし倫理的な語り口・行為・関係性が変化してきたプロセスをめぐる文献調査に基づいて、家庭料理をめぐる態度や思考に関する齟齬や対立の変遷が、科学哲学や科学技術社会論が伝統的に焦点を当ててきた科学的な論争とは大きく異なる仕方で展開されてきたこと、つまり、明示的な主張や反論や検証がなされないにも関わらず態度や営為の部分的な拒否と捻れた継承が共存するような「そっけない論争」の歴史として捉えうることを明らかにする論考をまとめ、本プロジェクトの代表者・分担者が参加して2014年に実施した研究会で発表した。

(9) 家庭料理をめぐる生活史的・倫理的・情動的な営為と家庭料理をめぐる産業やテクノロジーの関係性を「短い/長い」ネットワークの相互作用として捉えた上で、両者の相互作用について、戦後日本を代表する料理研究家(江上トミ、土井勝、小林カツ代、栗原はるみ等)を中心として分析した。とりわけ、1960~70年代における「手作り/手抜き」を対極とする空間に位置づけられる定型的な家庭料理の確立、1980~90年代における定型的な家庭料理の解体・脱構築、2000~2010年代における家庭と外食をつなぐ情報と消費のネットワークを、短い/長いネットワークの結節点として抽出できることを明らかにした。以上の議論の成果を、学術ウェブマガジン『E!』誌上にて三回の連載論文として発表した。

(10) 社会科学的分析の非明示的背景として「暮らし」を捉えた上で、種々の分析の妥当性/非妥当性を規定する生活様式自体を再帰的に分析に組み込んでいく「内部観測」的社会科学の方法論を構想し、上記の連載論文において、その具体的な展開例と方法論的精緻化を試みた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

山森裕毅、濁りと余白、『デイケア実践研究』、査読無、20巻2号、2017、9096

久保明教、なぜガーリックはにんにくではないのか? 家庭料理の臨界(3)、『E!』、査読無、11号、2017、3960

<http://eureka-project.jp/2017/03/31/e11/>

山森裕毅、場所と過程をめぐる試論(一):暮らしを支える場所の最小構造、『流砂』、査読有、10号、2016、133147

渋谷亮、引き裂かれを生きる 母になる/ならないために、『近代教育フォーラム』、査読無、25号、2016、159165

渋谷亮、戦後育児史ノート:松田道雄から90年代まで、『E!』、査読無、10号、2016、1732、
<http://eureka-project.jp/2016/10/22/e10/>

久保明教、「わが家の味」のパラドックス 家庭料理の臨界(2)、『E!』、査読無、10号、2016、38-48、
<http://eureka-project.jp/2016/10/22/e10/>

久保明教、わがまなワントンとハッシュドブラウンポテト 家庭料理の臨界(1)、『E!』、査読無、9号、2016、923、
<http://eureka-project.jp/2016/07/24/e9/>

山森裕毅、制度分析のプロトコル:幻想・集団・横断性、『流砂』、査読有、8号、2015年、240258

〔学会発表〕(計3件)

久保明教、なぜガーリックはにんにくではないのか? 家庭料理のネットワーク論、『家事とアート』研究会、2017年2月19日、成安造形大学(滋賀県大津市)

山森裕毅、余白と濁り、日本デイケア学会、2015年10月24日、大阪国際会議場(大阪府大阪市)

山森裕毅、釜ヶ崎という場で哲学する~「アジール・呱呱の声」の会の活動、支縁のまちネットワーク、2014年7月22日、金光教大阪センター(大阪府大阪市)

〔その他〕

ホームページ等

成安造形大学

http://www.seian.ac.jp/art_info/30036

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山森 裕毅 (YAMAMORI, Yuki)

立教大学・現代心理学部・特別研究員(PD)
研究者番号: 00648454

(2) 研究分担者

久保 明教 (KUBO, Akinori)

一橋大学・大学院社会学研究科・准教授
研究者番号: 00723868

渋谷 亮 (SHIBUYA, Ryo)
成安造形大学・芸術学部・講師
研究者番号：10736127